

歌の周辺

ものの考え方や生き方の面で、いろいろ改革したいことがある。明日になったら、その中のどれに取り掛かるうか、などと思案しつつ胡桃を眺めている……そんな内容の歌だが、結句は「からが、ひとつ」で字足らずである。迷いの気持ちや激しい感情を詠むとき、字足らずは効果的という考えがあつて、このような表現にした。

胡桃は、津軽出身の家内が好きで時々買ってきた。殻に入つたままの胡桃を、くるみ割りの器具でバキッと割って美味しく食べた。

(高野公彦)



(写真・田宮朋子)

高野公彦うた紀行・21

あすの日に何革^{あらた}めむ卓上に影ひきて胡
桃の殻が一つ

——『汽水の光』

【鑑賞】明日のために何を変革すべきか自問する初、二句。そのア音イ音（8音）の明るさが印象的だ。ここは変革への静かな情熱を讀むべきかもしれない。真夜中の灯りの下、歌の未来を思う作者、そして、作者に對峙する胡桃。「影ひきて」が胡桃を立体化する。青胡桃でもナッツでもなく、めっぼう堅い一つの「殻」。それはまるで、変革を志す孤独な魂のようだ。

(金子智佐代)



ふるさとコレクション——192

竪穴住居（茨城県土浦市）

霞ヶ浦の西の高台に縄文時代後～晩期の貝塚が馬蹄形に広がっている。約4,000～3,000年前、当時入り海だった霞ヶ浦では豊富な魚介類や塩が採れた。ほぼ環状にめぐる貝塚の内側は現在、上高津貝塚ふるさと歴史の広場として整備され縄文の人たちの暮らしを感じられる場所として地域内外の人に親しまれている。

竪穴住居は広場の数地点から発掘されている。写真の住居は一辺が約4～5mの角のとれた四角いかたちの掘り込みとして発見されたものを復元したもので、住居の中央部には火を焚くための炉の跡も見つかっている。入り口から中を覗いてみると仄暗い。炉に座す人の姿、横顔を想像すると遠いと思われる過去も体感としてはすぐそこにあり、汗ばんだ身体と台地を吹く風が今もここにあることが不思議だ。

ちなみにここ上高津貝塚は小説家江見水蔭の発掘によって考古学の世界にひろく知られるものとなった。編集者、翻訳家、冒険家でもある水蔭の『探検実記 地中の秘密』（明治42年）に「上高津と小松」として発表されている。

（写真・解説 松井 恵子）